

# ストックの八重鑑別と秋に向けた管理

JA全農長野 平谷 敏彦

## 1 品種選定

現在市場での評価が最も高いのはアイアン系である。茎が固いことから扱いやすいこと、花穂のつまりもよいことから業務用需要中心に絶大な評価を得ている。ただご承知のとおりアイアン系品種は鑑別品種なので、ストック栽培の最大のネックである八重鑑別作業が必要になってくる。

最近、アイアン系並みに茎が固くオールダブルで鑑別の必要ない品種も売り出されたが、やや花卉が弱く花いたみしやすいことから、評価はどうしてもアイアン系より下になる傾向である。

鑑別に挑戦してアイアン系をつくるか、無難にオールダブルをつくるかの品種選定は、農家の経験値、経営方針等を加味し選択する。

ここからは鑑別品種の栽培を前提に、八重鑑別のポイントを述べてみたい。

## 2 八重鑑別のポイント

### 1) 鑑別しやすい苗づくり

現地では育苗箱で育苗し鑑別後定植する方法と、シーダーテープ等で直播きしほ場で鑑別する、栽培法が取り組まれている。八重率を高めるには圧倒的に箱播きのほうが有利で、直播き栽培ではこまめなかん水管理や温度管理により、発芽をいかにそろえるかが重要になるが、ここでは箱播き育苗法を中心にポイントを述べたい。

### 2) 具体的な播種方法

育苗には水稻の育苗箱が最適で、1袋10mlの種子を5箱にまく。用土はピートモス系のメトロミックス等と赤土の混じった育苗培土を1：1の割合で混合したものがよい。ピートモス系だけだと鑑別で抜く際、根が絡み合っただけで残すべき八重の株まで一緒に抜けてきてしまう恐れがある。

適度な水分で培土を湿らせたあと箱に詰め、深さ5mm程度の溝を11列専用の溝付け器具でつける（写



写真1 溝付け



写真2 播種間隔

真1)。1箱当たり約520粒（1袋10mlが2,600粒）、1列当たりだと50粒弱を播くことになるが、数える必要はもちろんなく、写真2程度の間隔となるよう播種する。

この後の覆土が播種作業の中でも最も重要な作業になる。ごく薄くしかも均等に播くことが大切で、覆土が厚いと発芽が遅れそろった生育にならないため鑑別がやりにくくなる。写真3はすでに覆土を済ませたものだが、このようにつけた播き溝がわかる程度の薄さでよく、溝が隠れてわからなくなるようだと厚すぎる。覆土後かん水して土を落ち着かせるが、一部種子が見えていても追加の覆土はせず、新聞紙をかぶせてその上から軽くかん水し湿らせておけばよい。

秋ストックは高温期の育苗となるため、寒冷しゃ等をトンネル被覆して温度低下に努め、3日ほどして早いものが発芽し始めたら、新聞紙を除去する。遅れると徒長苗となり腰砕けとなるほか鑑別作業もやりにくい。

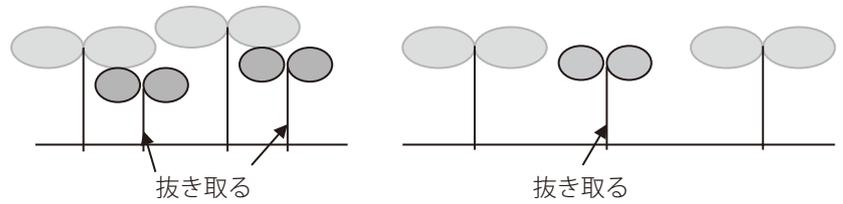


図1 八重鑑別の方法

て色や形で一重と思われるものを抜いていくのが第2段階になる。色の濃淡をわかりやすくするため、前日からかん水を控えるのもよい。

鑑別前と鑑別後の写真を並べてみたが(図2)、実物を前に実際ピンセットを握り経験を積んでいくしかこの技術を習得するのは難しいかもしれない。



写真3 覆土後

### 3) 鑑別のタイミングと本数

- ・ 1回目…子葉が展開し、そろった時(本葉が見えだしたころ) → 秋作では播種後10日くらい
- ・ 2回目…1回目から7日後くらい
- ・ 3回目…定植時

ていねいにやるとこの3回になるが、実際には1回目で大部分を抜き、2回目はチェック程度、定植時は生育の悪いものは植えないぐらいというケースが多い。

発芽率80%とすると箱当たり420本程度発芽するが、鑑別2回で6割抜いて4割残す程度に鑑別し、1箱当たり150~180本(1条15本前後)を残す。

### 4) 具体的な鑑別方法

ストックの八重鑑別がよく出てくるのが表であるが、実際場面でこの表に沿って抜こう

表 八重鑑別方法

ポイント	八重(残す)	一重(抜く)
発芽	早い	遅い
初期生育	早い	悪い
子葉の大きさ	長い	短い
子葉の形	卵・長円系	丸形
子葉の色	淡い	濃い
子葉の面積・草丈	大きい	小さい

としてもなかなかわかりにくい。

ベテラン農家の鑑別を観察すると、八重の方が発芽・初期生育が早いことに着目し、第1段階では図1のようにやや生育の遅いものは軒並み抜いていく。これでかなりの苗が抜かれ、その後上から眺め

鑑別前

鑑別後

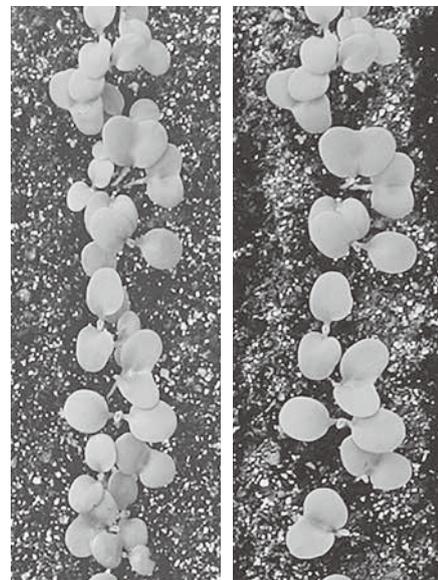


図2 アイアン系の八重鑑別

## 3 定植後の管理

秋ストックの場合、作型が早いほど草丈の確保が難しくなる。アイアン系の場合は特にその傾向が顕著で、早い時期だけ違う品種を作付けするという選択肢もある。アイアン系の初期管理ではかん水を十分に行い、やや蒸らし気味にして下位節間を伸ばし少しでも草丈確保を図る。その究極なのが密閉トンネル栽培で、低温で花芽分化するストックの生態を逆手に取り、高温で花芽分化を遅らせて栄養生長させそのぶん節数を確保しようという技術である。ただしこの技術の場合、トンネル内は50℃以上の高温となるため、トンネル内の湿度が100%でないと焼けにつながる危険な技術とも言え、慣れない方の導入はあまりおすすめできない。

(果実花き課 技術審議役)